

関西学院大学教授 細川正義

第21回

近代日本の転換期を見据える 夏目漱石

— 『三四郎』に描かれた「迷羊」の行方—

一九一六(大正五年)二月九日、近代日本文芸最大の文豪夏目漱石が数えて五十歳の生涯を閉じた。彼の最後は、「死ぬと困るから」であり看護士が求めに応じて水をかけると物静かに「有難い」と言いこれが最後の言葉となった。今年で没後百年を迎える。漱石が最後の作品『明暗』を朝日新聞連載の百八十八回まで執筆して絶筆せざるを得なかった苦しみは「死ぬと困るから」に込められているようである。しかし、死の時を悟った時に物静かに「有難い」と言った言葉にも偉大な文豪に相応しい達観の心境がうかがえる。

漱石が小説を書く必然と出会ったのは一九〇〇(明治三十三年)年からのイギリス留学である。そこで「西洋」と直面した漱石は思想と文化においてその違和感に苦しみ神経衰弱の危機に襲われる。そうした中で見出したのが「自己本位」という言葉であった。「自己本位」とは他者の中にあつて自分は自分であるという主張に基づいた考えであるが、彼はこの「自己本位」を認識することで孤立したイギリスの客舎にあつてもかくも自己を保ち留学を全うしたのである。しかしこの「自己本位」は帰国後「自己」への問いかけと自己の確立という課題として自覚されるようになり、そのことが結果として『吾輩は猫である』から『明暗』まで一貫した漱石文芸のテーマとなったと考えてよい。

『吾輩は猫である』は、無名の猫が苦沙弥先生の心奥を、最後は読心術まで用いて探るといふ展開であるが、最後は、ビールに酔って甕に落ちた猫が、死を悟って達観する形で閉じて、追究は次作以降へ持ち越している。以後様々な漱石の作品が展開していくが、『彼岸過迄』で「世の中と接触するたびに」「内へとぐるを捲き込む」ように「だんだん深

く細かく心の奥に喰い込」むように問い詰め「命根」に触れようとする須永市蔵を描き、最後の『明暗』では、残り少なくなつたのちを予感した漱石がいよいよ「根本的の治療」を決行して人間の存在の根源を問ひ、自己本位の確立を目指そうとした。そのような漱石の作家人生を辿れば、最後の「死ぬと困るから」と「有難い」は実に重く、それは百年後の現代に生きる我々にも重く響く言葉である。

その中で、一九〇八(明治四十一年)年の『三四郎』を改めて問い直すと、この作品も大きなメッセージが託された作品である。主人公小川三四郎は二十三才、熊本第五高等学校を卒業して帝国大学へ入学するために上京する列車の中から始まる。列車の中で、後に広田先生と分かる人物と乗り合わせ、途中から親しく話をするようになった彼から「熊本より東京は広い。東京より日本は広い」「囚われちゃ駄目だ」と言われる。三四郎はその言葉を聞いて「真実に熊本を出た様な心持がした」と思う。

東京での生活が始まると、見ることも聞くことすべて新鮮で刺激の多い毎日が過ぎていくが、同郷の先輩野々宮宗八を理科大学へたずねて行った折に大学構内の池の端で美しい女性を見る。講義中に佐々木与次郎と口をきくようになり、彼の寄寓する広田先生を紹介された。汽車の中以来の再会をするが、与次郎は広田先生を、学識は抜きんでているが、世間では少しも光らないまるで「偉大なる暗闇」だと紹介した。そうして都会での学生生活が少しずつ広がっていく中で、広田先生の引越しの手伝いの時、池の端で出会った女性里見美禰子と再会し、親しくなる。引越しの翌日、広田先生たちと団子坂の菊人形を見に行った折に、美禰

子は三四郎にストレイシープという言葉を示して謎めいた印象を残した。数日後美禰子から、「二匹の迷える羊」と「悪魔を模した」男を描いた絵葉書が届いたが、また美禰子の示したストレイシープの意味を解さない三四郎は、単純にストレイシープの「二匹を暗に自分に見立ててくれたのを甚だ嬉しく思」ったばかりである。そのストレイシープは、作品の最後で、美禰子が結婚前から描かせていた肖像画が出来て、展覧会で画を覗いた三四郎が、その画に「森の女」と題が付けられていたのに対して、その題ではなく「迷羊」だと口の内でも繰り返すところで意味を成してくる。その時三四郎が何を思っていたのか、様々な推測を可能にするが、画を前にして美禰子の画の題として「迷羊」を想起しているだけでなく、三四郎自身も自らがストレイシープのただ中にあることを自覚していることは推測できる。

東京に出て間もない頃の三四郎は、自分の中に三つの世界が出来たことを自覚している。一つは、「明治十五年以前の香がする」「過去」の世界、二つ目は「生計はきつと貧乏である」が日常を超越した学問の世界、三つ目は「燦として春の如く盪いている」華やかさや恋が存在する青春世界であり、三四郎は「国から母を呼び寄せて、美しい細君を迎えて、そうして身を学問に委ねる」形で「三つの世界」を共に所有する未来を想像する。しかし、〈偉大なる暗闇〉の広田先生と交わり、美禰子の不可思議な魅力に翻弄され、心が動揺する中でそうした皮相的な世界観では世の中に関わっていけないことを感じるようになる。

美禰子の提示したストレイシープは作品では謎のまま残されるが、おそらく美禰子の意図したところは、奥の深い世の中と触れていかなければならない卑小な一人の人間の頼りなさに関わっていることが推測できる。広田先生に「あの女は自分の行きたい所ではなく、つちや行きたい」と言われる彼女が、野々宮とはなく、兄の友人と、周囲には唐突とも思える形で結婚していった心境は、三好行雄が「自分の行きたいところへ嫁ぎ、夫として尊敬できる男を選んだ」（『作品論の試み』至文堂、一九六七年）と推測する通りであろう。しかし、作品の終盤の教会の前で三四郎の前に「われは我が怨を知る。我が罪は常に我が前にあり」と

いう聖書の言葉を咬いた美禰子に対して越智治雄は「断念したものの悔恨」（『漱石私論』角川書店、一九七一年）を読み取っているように、美禰子の結婚は不可解な印象を残している。美禰子は自分で決めた結婚ではあるが、何かの理由によって、自己の青春に封印をして、世の中の仕組みに従う選択をしたのかもしれない。「森の女」でなく「迷羊」だと呟く三四郎と、結婚に至る美禰子の選択とを共振させて結末に向かわせようとする作品の仕組みを感じることもできる。美禰子の結婚と、出来上がった「森の女」の画を前にして三四郎が、おそらく、はかり難い人間の関係と、不可解な心の動きについて、他者に対しても、自らの内にも発見して、まさに「自己本位」をたずねる旅の途上とも言えるストレイシープの状態に立ち止まったところで、作品は終わる。

列車の中で広田先生に、「日本より頭の中の方が広いでしょう」と告げられたように、三四郎はこれからはもっと頭をめぐらし、他者と自己の関係の深淵をたずねていかなければならない。『三四郎』のあととの『それから』『門』では、三四郎が遭遇した他者との関わりよりも、人生に対するもつと身近で切実な愛の発現と、不可解にうごめく自己の内奥と対峙する登場人物が描かれていく。漱石の描く登場人物たちは、『行人』の一郎は「どうしたらこの研究的な僕が、実行的な僕に変化できるだろう。どうぞ教えてくれ」と言って涙を流し、『こころ』の先生は、若き日に恋の虜になつて友人を死に至らしめた自己の内奥の罪と半生をかけて対峙し続ける。最後の『明暗』では主人公が自己の生の実相を見極めようとして意を決して、これまで解けないまま悩まされてきた過去の関係性を究明するための旅に立った。結局『明暗』は、真相を解きほぐせないまま絶筆したが、百年前に残した漱石の課題は今も解決されていない。現代は百年前よりも格段に進歩し人間関係も複雑になっている。しかし、ストレイシープという言葉の前に佇立する三四郎の呟きは今の青春群像にも通底する。「死ぬと困るから」と最後に咬いた漱石の言葉は、私たちに自己本位の確立の道標を示せなかった痛恨と祈りをも含んでいることを、若者たちにぜひとも受け止めてほしいと願っている。